

【11月の気象】

11月は、秋から冬への季節の変わり目で、天気は周期的に変化する時期です。11月の季語にあるように「小春日和」と呼ばれる春のように暖かく穏やかな日もありますが、西高東低の冬型の気圧配置になると、大陸から寒気が流れ込み、北西の季節風が吹き、肌寒い日もあります。日々の温度変化は大きくなり体調を崩しやすい季節ですので、健康管理には留意が必要です。

松山地方気象台では冬の季節現象を観測していますが、早い年では11月後半に、初霜、初雪、初氷及び初冠雪を観測しています。

ここ3年間の初霜、初雪、初氷、初冠雪の観測日

寒候年	初霜	初雪	初氷	初冠雪
2023年	1月3日	12月19日	12月20日	12月2日
2022年	1月10日	12月17日	12月26日	11月24日
2021年	12月20日	12月21日	12月17日	12月31日

*寒候年:前年8月から当年7月までの1年間です。例えば「2023寒候年」とは、2022年8月から2023年7月までの1年間です。

ここ3年以前の松山地方気象台における冬の季節現象はこちら

<https://www.data.jma.go.jp/matsuyama/kansoku/kisetsu.html>

【気象用語】「地球温暖化による降水量の変化」について

1800年代後半以降、人類が温室効果ガスを多量に排出し、その結果、地球が温暖化してきています。地球が温暖化することで気温は上昇しますが、降水量にも大きな影響を与え、大雨が増えることが懸念されています。この度、気象庁気象研究所と各大学、各研究機関で共同研究した研究結果が発表されましたので紹介します。

この研究によれば、線状降水帯の発生数は、過去実験に比べ4度上昇実験では関東から九州にかけて広範囲で10年あたり2回以上の発生数が増えています。特に紀伊半島や四国、九州で発生数が増えています。また、これまで線状降水帯が観測されていない東北北部や北海道でも少ないながら線状降水帯の発生が見られます。日本全国で1年あたりの線状降水帯の発生数を見た場合、過去実験に比べ、2度上昇実験では1.3倍、4度上昇実験では1.6倍に増える結果となりました。

50年に一度の大雨も増加すると見られ、年最大24時間降水量は過去実験と比べ4度上昇実験では全国的に増加し特に東海や九州にかけての太平洋側と北日本では増加率が40%を超える場所も見られました。

台風に起因する大雨の増加も見られますが、梅雨期間の降水量は確信度が低いものの減少する結果となりました。これは、梅雨前線の北上の遅れ、日本域での早期の弱体化が考えられます。梅雨期間の降水量が減ることは大雨による災害のリスクは下がりますが、渇水のリスクは上昇します。

この研究の詳細は気象庁ホームページに掲載されていますので興味のある方はご覧ください。

https://www.mri-jma.go.jp/Topics/R05/050919/press_050919.html

用語

○過去実験

1951年から2010年までのデータを基にした再現実験

○2（4）度上昇実験

産業革命以前から21世紀末までに2（4）度上昇するというシナリオを基にした予測実験

